



一、「鈴の森」について(II 中世・近世編 ふくさきの歴史遺産をひも解く : 地名や地域に残る古文書から)

井上, 舞

(Citation)

共同研究「福崎町の地域歴史遺産掘り起こし及び大庄屋三木家住宅活用案の作成等」(ふくさき再発見～歴史をたずねて～ : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター平成23年度活動報…

(Issue Date)

2012-03-28

(Resource Type)

research report

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003853>



Ⅱ 中世・近世編 ふくさぎの歴史遺産をひも解く

く地名や地域に残る古文書からく

一、「鈴の森」について

井上 舞

現在の福崎町西田原に鈴の森神社という神社があります。この神社は、瓊瓊杵尊などを祭神とし、安産や学問の神様として知られています。また、幼い頃の柳田国男は兄弟とともに、よくこの神社の境内で遊んでいたようです。柳田国男の著書『故郷七十年』（のじぎく文庫／昭和三十四年）には、鈴の森神社の思い出として、

そこから（注：在位堂）から一丁ほど北の方に氏神の鈴の森神社があり、大きなやまもの樹があった。またを明神様ともいい、村人は赤ん坊が生まれると、みなその氏神に詣でて小豆飯を供えていた。その余りを一箸ずつ、集まって来た子供たちのさし出す掌の上にのせるのがならわしであり、村の童たちの楽しみでもあった。前もって、その日を知って、童たちは神社へあつまってくるのであった。

七つ八つから十歳になるころまで、私は何度となく神隠しの話を耳にした。辻川の鈴の森神社は、丘陵の傾斜面の一部が段々になった側にある。その突端で村の者がいっしょになってお宮を拝むようになっていたので、神隠しの話が生れるのに都合よく出来ていた。夕方、子供が村のどこかで遊んでいると、白髪のお爺さんが出て来て、「我は鈴の森じゃ、家で心配しているから、はよう戻れよ」と親切にいわれたから帰って来たという話を、子供心に本当のことのように思っていた。

といったエピソードが残されています。

この鈴の森神社が、いつ頃創建されたのかについては、現在のところわかっていません。古代末期から中世にかけての田原地域は、田原荘と呼ばれる荘園でした。この田原荘にかんする土地調査結果を記した「田原荘実検注進状」という、正応四年（一二九一）に作成された文書が残されています。そこには、与位社や妙徳寺（現妙徳山神積寺）といった、現在にまで残る寺社の名前がいくつかみられます。しかし、これらの寺社の中に鈴の森の名前は見えません。さらに時代が下って、宝暦十二年（一七六二）頃に成立した播磨の地誌『播磨鑑』でも、鈴の森については、観音堂があると記しているだけで、神社が存在していたような記述はありません。とすれば『播磨鑑』が成立した頃には、鈴の森神社はもしかしたらまだ存在していなかったか、あったとしても、神社と呼べるほどの規模を持った社ではなかったのかもしれない。しかし、神社の創建が新しいか古いかはともかく、鈴の森という場所そのものは、古くから特別な意味を持った場所で

あったようです。鈴の森にかんする資料はそれほど多くありませんが、以下、鈴の森にかんする記述がある資料から、鈴の森という場がどのような場であったかを考えていきたいと思います。

鈴の森という地名が確認できる一番古い資料は、南北朝期に成立した『峯相記』という書物の中に収められた、酒見大明神の縁起です。それによれば、同社の由来は、山酒人という人物のもとに摂津の国住吉の辺りから来たという三人の貴人が現れ、請われるままに酒人が一夜の宿を貸したところ、植えた苗が一夜にして槻の木となり、そこに社殿を建て、住吉と酒見の両大明神を祀ったとされています。さらに縁起によると、この酒見大明神では、毎年四月の初丑の日に御祓を行っていたようです。『峯相記』の記す酒見大明神縁起には、次のように記されています。

毎年四月初丑日、飾万津二御祓トテ御出、後二八田原川へ御出、鈴森是也、当時八社頭ノ南、常滑へ御出

つまり、古くは飾磨津に御祓のために出向いていたが、後には田原川で御祓を行うようになった、それが鈴の森である。現在は酒見大明神の南にある常滑で御祓が行われている、と記されているのです。

御祓とは、身についた穢れや災厄を落とす儀式で、多くは水辺で行われました。これは水が穢れや災厄を洗い流してくれると考えられていたからです。酒見大明神についても、飾磨津や田原川（現岩尾川）といった水辺で御祓が行われていることがわかります。鈴の森はおそらく、御祓のために田原川に出向いた酒見大明神が一時的に鎮座した場所だったので

しょう。

酒見大明神の縁起からは、御祓が行われる前からこの地が鈴森と呼ばれていたのか、それともこの地で御祓を行うようになってから鈴森と呼ばれるようになったのかは、判然としません。とはいえ、中世において、鈴の森が神事を行うのにふさわしい場所であると認識されていたことは確かでしょう。また、「鈴」には悪いものを祓い清める効果があると考えられていました。その「鈴」の字を冠していることから、この地は、周辺地域の中で、何か特別な意味を持たされた場所であったと考えることができます。

もう一つ、鈴の森という地名は出てきませんが、鈴の森周辺地域の性格をうかがわせる記事が『峯相記』に残されています。以下は、『峯相記』が載せる妙徳寺の縁起です。

次妙徳寺者、大納言範卿ノ息、慶芳内供最初ノ建立、一条・三条両帝ノ御願所也、彼内供、西国巡礼ノ次、正暦二年三月八日、当国田原ノ庄有井村二一宿、夢ノ内二貴僧一人出来リ、枕ニ立テ告ケテ云、此東ノ山ノ下ハ仏法繁昌ノ地、四神相應ノ砌ナルヘシ、汝ヲ待テ今ニ興セス、早ク寺ヲ立テ、薬師如来ヲ安置スヘシ、我ハ是薬師如来ノ応化妙徳菩薩也云々、霊夢ニ驚テ尋見ルニ、実ニ殊勝ノ霊地也、仍伽藍ヲ建立ス、

縁起によれば、大納言範卿の息子である慶芳内供が西国巡礼の途中に、有井村に宿泊した際、夢に妙徳菩薩が現れ、有

井村の東の山の下が仏法繁昌の地であるから、そこに寺院を建立しよう告げた。慶芳内供が夢から覚めて、実際にその場所を訪れてみると、確かに妙徳菩薩が告げたとおりの霊地であったので、そこに寺院を建立したとあります。

この縁起の中で注意したいのは、慶芳内供が一宿して霊夢を見た場所が、有井村である、という点です。有井村とは、おそらく現在の在位堂が残る付近にあった村のことと考えられます。縁起には、慶芳内供は西国巡礼の途中に有井村に宿泊したとあります。この辺りは古くから、北条と山崎を結ぶ東西の交通路と、飾磨と生野を結ぶ南北の交通路が交差する交通の要衝でした。そして、道と道が交わる地点は、単に交通の要衝であるばかりではなく、呪術的な意味も持っていました。

現在、この付近は「辻川」と呼ばれています。辻川の名が資料上に見えるのは近世期以降ですが、その名の由来は、東西南北の交通路が交わる場所、つまり「辻」であることがもたになっていると考えられます（『角川日本地名大辞典』角川書店／一九八八）。そして「辻」は、古代から特別な場所―霊的な力を帯びた場所、あるいは現世と異界との境界―とみなされてきました。

妙徳寺の縁起の中で、慶芳内供が妙徳菩薩の夢告を受けたのは、実際に妙徳寺が建立された場所ではなく、少し離れた鈴の森の側の有井村と設定されています。もちろん、ここが交通の要衝であったがために、周辺に旅人が宿泊する場所があったことも考えられます。ですが、それよりもむしろ、鈴の森を含み込む一帯が「辻」的な性格を帯びていた場所であることが、慶芳内供がお告げを受けるのにふさわしい、あるいは、妙徳菩薩が現れるのにふさわしい場所であると考えら

れたのではないだろうか。

では次に、近世の資料に見える、鈴の森について見ていきたいと思います。先に紹介した近世の地誌『播磨鑑』は、播磨国内の郡域ごとに、寺社や旧跡を「神社」「仏閣並寺院蹟」「名所旧跡並和歌」「古城跡並構居」等の項目に分けて記しています。鈴の森については、「神社」の項目ではなく、田原川（現岩尾川）と並んで、「名所旧跡並和歌」の部に入られています。ここでは鈴の森と田原川は、次のように記述されています。

【鈴の森】 田原莊 在 観音小堂

男己貴尊峰相山ヨリ宍粟郡へ遷座ノ時播磨ノ神々集会之所也昔神東神西郡不_レ分時神崎ト云此地也

竹岡尼

いつの世に出たる神の鈴の森田原の河ノ流れ盡せし

山重藤

鈴の森跡たへもせぬ神さひて雲津の河ノ名をそ残せる

【田原川】 神東郡ノ雲津川

太田兵庫

たはら川雲津の川のあとふりて神さひ渡る神くらの森

現在の穴栗市に鎮座する、播磨一宮伊和大明神の祭神である男己貴尊（オホナムチ）が、峯相山（現姫路市）から穴栗郡（現穴栗市）へ遷る際に、播磨の神々が集った場所が鈴の森である。かつて神東郡と神西郡に分かれていなかったとき、神崎と呼ばれていたのがこの場所である。というこの伝承は、おそらく峯相山鶏足寺の縁起と伊和大明神の縁起が下地となって生まれた伝承だと思われます（※1）。神々が集まったのは、男己貴尊の遷座の手伝いをするためだったのでしょうか。詳しい理由はわかりませんが、峯相山や穴栗郡ではなく、鈴の森に神々が集合したという伝承が生まれたのは、鈴の森が神々が集まるのに相応しい場所であるという認識がその背景にあったからだと考えられます。それはつまり、先にも述べたように、この地域が古くから東西南北の交通路が交わる交通の要衝であったこと、そして鈴の森が神霊とかかわる特別な場所であったことが大きく影響しているのです。

また、残された和歌からも、鈴の森に付された性格が伺えます。鈴の森が「神社」の項目ではなく、「名所旧跡並和歌」の項目に入れられていることから考えると、この場所は歌の題材としてよく取り上げられた場所なのかもしれません。ここには三つの和歌が挙げられていますが、これらを見ると、いずれも「神」と「森」と「田原川」が同時に詠み込まれていることがわかります。先の酒見大明神の縁起では、御祓を田原川で行い、その儀式の際に用いられた場所が鈴の森でした。その後『峯相記』が成立した南北朝時代には、御祓の場所は、酒見大明神の南にある常滑へと移ったようですが、鈴

の森が特別な場所であるという認識は、近世にいたってもなお存在し、『播磨鑑』が記すような伝承や和歌を生み出していったのです。

以上、中世から近世の資料に見える「鈴の森」について紹介してきました。鈴の森に関する資料は非常に少なく、これらの資料からだけでは、実際に鈴の森がどのような場所だったのか、具体的な性格を明らかにすることは難しいといわざるをえません。ただ、これらの資料の全てが、鈴の森が神とかかわる場所であることを示していることは確かです。また、冒頭で紹介した『故郷七十年』の鈴の森神社にまつわるエピソードの中で、柳田国男は鈴の森神社が鎮座する丘陵の地形が、神隠しの話が生まれるのに都合のよい地形であったと述べています。こうした地形的な特徴も、鈴の森が特別な場所と意識される一因だったのかもしれませんが。

現在ある鈴の森神社については、その歴史はそれほど古いものではないのかもしれませんが。しかし、鈴の森神社がこの場所に鎮座した背景には、古代から中世にかけて形成されていた、鈴の森という場所の持つ性格が大きく影響していたのです。

※1 『峯相記』によれば、伊和大明神と峯相山鶏足寺の縁起は、神功皇后が三韓を攻めた際に、伊和大明神の祭神である男己貴尊は副將軍として、遠征に付き従った。その後皇后は西から敵が攻めてくることを恐れて、これを防ぐために、男己貴尊を伊和の地に配した（伊和大明神縁起）。この時、皇

后が人質として新羅から連れてきた王子は、その身柄を男己貴尊に預けられ、後に峯相山に登って、鶏足寺を開いた（峯相山縁起）。という内容になっており、二つの縁起が相互する内容を持っています。二つの縁起の中では、男己貴尊が最初峯相山に鎮座し、後に穴栗郡に遷ったという話は見られません。しかし、こうした相互する内容を持つ縁起の存在が、やがて『播磨鑑』の「鈴の森」にまつわる伝承を生み出したのではないかと考えられます。